

古墳と平野の問題

伊 達 宗 泰

(I)

三世紀後半より大和朝廷が漸次国内の支配体制を強化し七世紀に至って覇権を確立して古代政權の成立をみるが、その前代の弥生式時代に發生した地域的集團大和朝廷による統一以前において存在した首長が、また古墳時代に入つてからの豪族たちが如何なる地理的条件、あるいはどの程度の生産力を有した地域にどのような版圖を有して播居したかは不明な点が多い。古くは三友国五郎氏が新しくは藤岡謙二郎博士が、古墳と平野の關連^①をとりあげられた卓見は意義深いものがある。筆者もこの点の解明に何等かの手がかりはないものかと考え、先に拙稿「遺跡分布よりみた古代地域」を發表したわけであるが、いまだその検討、追究をせず批判を受けないままに本論をすすめることは資料不足、検討不足で時期尚早の感をまぬがれない。しかし一つの核となるべき地域を把握し前記研究と併せて地域をひらめ検討するというごとにして論を進めたいと思う。

古代地域を理解する上においてその時代が農耕生活を基盤とし、その生産力が支配力の根源であつたとすれば、それらの農業共同体は水というものをぬきにしては考えられない。ために水系を中心とした山麓斜面、扇状地、流域低地を組合わせ、弥生式遺跡、古墳、式内社の分布と対照して考え、一水系または二、三の水系を一つの単位とした古

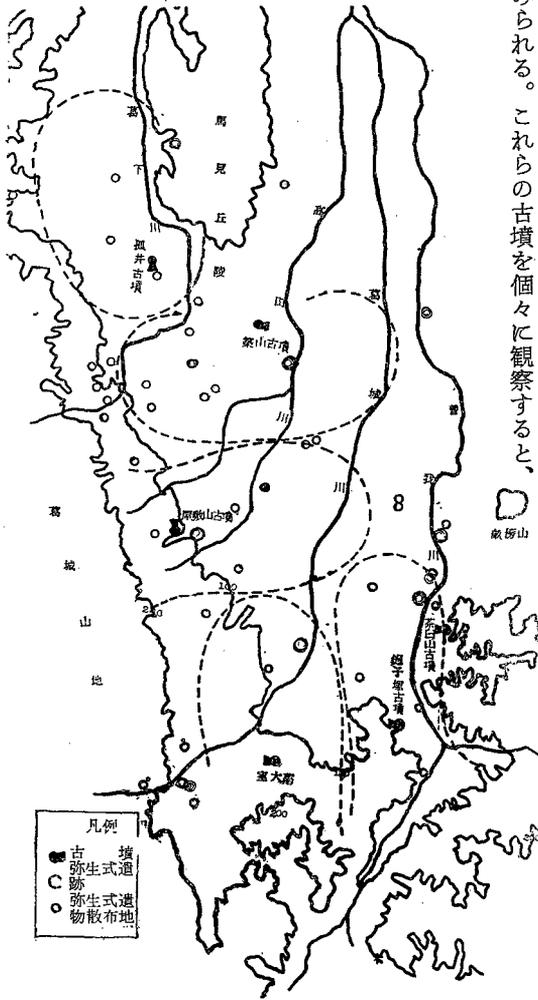
代生活圏といつか地域集団の社会圏が考えられるというのが前述の拙稿の論点である。それを基礎的な考えにして古代豪族の生活圏・社会圏というものがどのような範囲の地域に考えられるか、いまだ結論を出すべき段階には至っていないが、その説明の一つの鍵として事例をあげ一試論としたい。この問題を考える場合、連続する時間的空間を重ね合わせるという景観変遷史的立場でなく一つの時間的空間の断面を把握する立場をとらねばならない。しかし把握する被葬者自体の性格、社会的地位や身分、勢力等に関しては明らかでない豪族の中核となるべき生活圏・支配圏を考えることもそういった内容については不明の段階である。明らかでない豪族の中核となるべき生活圏・支配圏を考えることは根底より論理がなりたないことにもなるが、高塚の発生をみる古墳時代に入り、その遺産である墓々と横たわる大墳丘をみるときにそれを營造せしめた権力と、経済力の実在を認識せしめられ、その頂上に立つて周囲を俯瞰すればさらにその支配する地域や生産力との関連などから生活圏といったものの実存が感じさせられる、ためにその地域に何という氏族が播居していたとか、あるいはどのような性格の氏族であったかなどの究明は他にゆずって、本稿では古墳時代における権力者の墳墓である古墳が実在するところから出発してそれらの古墳を築造せしめた営力の基礎である生産地域というものを追究してみることにした。しかし古墳そのものにとらえかたにもいろいろとあり、例えば、単独に存在するもの、群をなして存在するもの、墳形の差、墳丘規模の違い、内部構造上の違い、築造年代の相違等等、複雑な様相で混在している現状であり、さらに困難なことにはそれらはすべてが調査されて明らかになっているのではなく不明の状態にあることである。そのためまずこれらの古墳そのものの整理が必要となり古墳群などになってくると単に形態とか时期的な関係ばかりでなく、これらの群を墓地と考えてそれは一集落あるいは二集落以上の共同体的なものの墓地であるとか、単一氏族の累代的なものであるとか、内質的な有機的関連性の問題も生

じてくる。しかし先に述べた如く一時期における空間の復原を試みる点から、まず各時期にまたがった古墳群であればその群を問題とするのではなく、ある時期のものを抽出しさらに単独の古墳を選びその性格を明らかにする必要がある。そしてつぎにそのある時期における空間抽出のためそれら古墳の分布状態を確認し相互の関係を考察する必要がある。すなわち墳丘の規模、内部構造、出土遺物の質、量などと立地環境などによって、被葬者の力の強弱とともにその被葬者の勢力圏あるいは生活圏ともいうべきものとの相関関係などを描出するという方法である。

(II)

以上の見解にたつて、ある地域を限定して考えるわけであるが、各種の要素を省去し、単純な形で示してみたい。すなわち奈良県の場合、盆地全体が遺跡であるといつても過言ではない程多種多様の、また各時代にわたつての数多くの遺跡遺構が存在している。その中で古墳だけに限つたとしても一萬基を越える膨大な数量である。しかし一基の古墳を築造した被葬者の支配力を考えた場合、奈良盆地全域を支配したとは考えられず、より小地域的なものである。それで全体的に把握するのでなく、南大和すなわち奈良盆地南部と平群谷、生駒谷、富雄谷という低地と河谷の地域に焦点を合わせて考えていきたい。南大和の平野は地図を読んだり北大和の山頂より奈良盆地を展望すると、盆地全域は一つのまとまった地域にみえるが、この地域一円は盆地中の一盆地といった一区画をなした地域で一つのまとまりをもつた小地域である。葛城川、高田川、曾我川の流域低平地が中核で西方は葛城、金剛の連峰が聳え、葛下・葛城・高田の諸川の水源をなし、その山麓斜面にそれら諸川の扇状地が発達して低地に望み南部は国見山を中心とした山塊が吉野川河谷との間にのびて境をなし、東方は越智岡丘陵が横たわっている。北方は大和平野に拡がるが、

馬見丘陵が咽喉部を扼する如く存在して盆地との障壁を形づくり前述の如き一小区画を形成している。この地域における五世紀初頭から中葉にかけて築造されたと認定される古墳の存在をみると室の大墓、掖上の鐘子塚、大屋の屋敷山古墳、築山の陵墓参考地、狐井塚などがあげられ、それより時期のさかのぼるものとして鳥屋の茶臼山古墳などの分布がみられる。これらの古墳を個々に観察すると、



第1図 南大和の古墳分布図

室大墓⑥巨勢の丘陵が奈良盆地にむかって北にのびる丘陵の分岐した一つの尾根が、西南から東北にむかって派生している丘陵端に築造されたもので、葛城川がこの古墳のすぐ西を北流しその河流は肥沃な平野を形成したことを物語っている。本墳は主軸をほぼ東西に、前方部を西面させた前方後円墳で周濠の存在が地貌にあらわれている。その規

横は全長二三メートル、後円部の径一〇五メートル、後円部の高さ約二五メートルで整然と三段に築成されている一級の前方後円墳である。この古墳は墳丘表面には葺石、円筒埴輪の樹立が認められ、明治年間に前方部より絵模様神獸鏡二面分、三角縁神獸鏡一面、獸首鏡一面分を含む一一面の漢式鏡と滑石製勾玉二九箇、管玉完形七箇と破片、棗玉一箇、玻璃小玉約百箇、石製刀子など多数の遺物出土が伝えられていたが、昭和二五年発掘調査が行われ、その結果、後円部頂上に二つの竪穴式、石室が構築され、中には雄大な長持形石棺が安置され、これらの石室を囲んで二重に埴輪列が圍繞し、それらは甲冑、楯、靱など武器を形象するものが多く、石室内部からは既掘の厄にあつては勾玉、管玉などの玉製品、短甲片、琴柱形石製品、刀劍類、石棺内よりは玉類、石室外よりは数多くの石製模造品(刀子、斧頭)漢式鏡片などの出土をみている。

要するに墳丘・遺物の上からみて古墳時代中盛期の五世紀前半期の頃と考えられ、被葬者の地位の高さを示している。

披上罐子塚^④—巨勢の丘陵が北にのび、越智岡の丘陵と相對する北斜面柏原の集落に面するところに罐子塚は存在する。三段築成に整美されたもので周濠をめぐらした痕跡を示し、陪冢とみられる小円墳も濠外に存在している。墳丘上には葺石、埴輪円筒列が整然と樹立しており、南側くびれ部に水鳥形の埴輪が検出され報告されている。長持形石棺が内包され、築造年代などは前述の室大墓などとそう大差なく、未だ調査がなされていないため詳細は不明であるが、墳丘の規模、外部施設などからみて、矢張り室大墓などに匹敵するものと考えられ、相對する豪族の墳墓とみえさしつかえないだろう。

築山古墳^⑤—奈良盆地の西南部に發達している馬見丘陵の最南端に位置し、丘陵中の馬見古墳群よりはやや離れて丘

陵南部の低平地に面して立地している。全長二一〇メートル、後円部の径一二〇メートル、前方部の幅一〇五メートルで周濠をめぐらした壮大な規模を有するもので陪冢などもあり古墳時代最盛期の特徴をそなえており、現在陵墓参考地に治定されている。

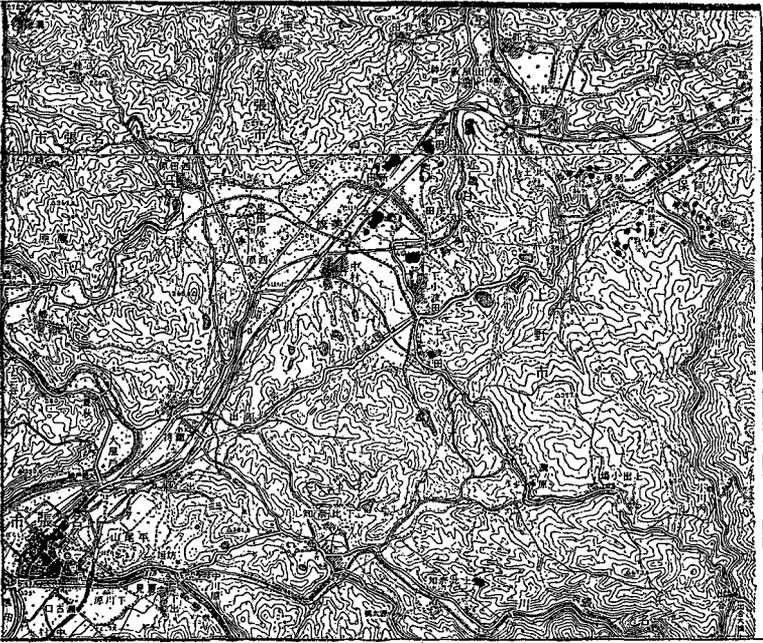
狐井塚^⑨―葛下川流域の狐井集落の付近に位置し、周濠をめぐらした前方後円墳で規模も雄大でその墳形も古墳時代最盛期の様相を示し、葛下川流域にはこれに匹敵する大規模なものはない。

屋敷山古墳―新庄町より葛城山麓をさかのぼっていくと大屋の集落に達するが、その南に存在する大規模な前方後円墳でこの山麓斜面には特殊な古墳や千塚と称する後期群集墳は群在するが、時期のさかのぼりうるのはこの屋敷山古墳のみである。後円部墳頂付近に偉大な長持形石棺の蓋石が露出しており、時期的に室大墓などと前後する時代のものであることを物語っている。

といずれも五世紀初頭より中葉に至る古墳時代中期の様相を示し、時期的にも半世紀にもまたがらないことを物語っている。そうするとこれらの古墳はあまり時期のへだたらない間に営まれたことになり、これらの墳墓を造営し得る被葬者がそれぞれの地域に割拠していたと推定してさして誤りでないであろう。すなわち室大墓は葛城川流域の低平地を前面に擁し、披上の罐子塚は曾我川流域地域を控え、屋敷山古墳は高田川流域地域を擁している。狐井塚は葛下川流域、築山陵墓参考地は馬見丘陵東面の高田、葛城川の併流低平地域を擁していたのではなからうか。

つぎに竜田川流域の河谷をみると南大和の如く平坦面の広い地域でなく、生駒山脈と矢田丘陵の間に狭まれた断層谷であり、竜田川により侵蝕をうけた河谷である。この川は上流部は生駒川であり中流のマンガの淵とよばれる峡谷を境にして竜田川となり南流して蛾瀬とよばれる小峡谷をへて大和川にそそいでいる。傾動地塊の生駒山脈は背面を

東にむけ、その緩傾斜面は耕地化が進み水田が樹枝状に発達している。この河谷における古墳分布をみると平群谷には後期古墳約三〇基ばかりでその中横穴式石室を有するもの一二基の存在がみとめられるが、前期に編年される古墳は未だ発見されずただ一基平群谷をさかのぼる上流生駒川の右岸に竹林寺古墳一基の存在をみるのみである。この地域は地形的に一つのまとまった地域であり、古代豪族平群氏の拠地と考えられている注目すべき、問題のある地域であるが、これら古墳群との関連などについては未だ解明されるに至っていないが、正税帳などにより平群郡の租税など分明する地域として有意義な地方である。竹林寺古墳^⑨は生駒山の東南麓、暗峠越の北側に生駒川に面して突出した丘陵上の行基の墓の所在で知られる竹林寺の境内に存在する。この丘陵の東端に前方部を東面して営まれた前方後円墳で、たまたま昭和一四年に後円部が発掘され内部主体が明らかにされたが、基底部に礫床をもうけその上に粘土を舟形に作りこの層中に遺物を含む朱層があり、さらに礫層とその上に蓋石、さらに割石をかまぼこ状に積重ねるといふ特殊な構造で、遺物として長宣子孫内行花文鏡片、碧玉製石剣、刀剣、鉄釘などの出土がみられ、古墳時代前期の特徴を示し、四世紀後半の時期に治定される。前述の如く、これは生駒谷に属する地域に立地し、この古墳以外に古墳が発見されておらず、後期の古墳が平群谷に表われるわけであるが、この両者の関連は明らかでない。この平群谷に隣接した矢田丘陵の東側、西之京丘陵とはさまれた富雄川流域河谷地域は、こゝも平群谷同様地形的には一つの完結的な地域を形成している。そして神武伝承にみられる鳥見に治定されている地域であるがむしろ遺跡は少なく古い時代の開発を示すものは乏しい現状にある。この河谷も平群谷同様前期にさかのぼりうる古墳は丸山古墳茶臼山古墳の二基のみで他は後期に属するものである。丸山古墳^⑩は富雄川の河流が峽谷より盆地に流出する溪口部にあたり、矢田丘陵の東斜面が東南部では西田中、大和田の丘陵に分れるが大和田にのびる丘陵北部の小丘阜を利用した前方後



第2図 美濃波多盆地

円墳で画家帯竜虎文鏡、五神四獣鏡などの鏡鑑類に銅製釧形金具、銅板薄板や滑石製の鑿、釜頭、刀子、鍬形石、琴字形石製品などの石製品模造品、碧玉製盒管玉類など多数の特殊な遺物を出土している。

つぎに奈良県外での地域に目を転じてみよう。今までは同一時期の古墳分布により、それらの割拠性と地域性をみたわけであるが、成層的な構成をもつ古墳群を包有する地域を検討してみると三重県名賀郡美旗地方がある。この美濃波多盆地は大和と伊勢をつなぐ交通の要衝にあたり、径三キロメートル程度の小盆地であるが、八基のそれぞれの時期にわたる古墳を擁した一生産地帯である。古墳の分布は盆地中央部に本古墳群最大の馬塚という前方部を西にむけた全長一四〇メートル、後円部径八九メートル、前方部幅一〇メートル、周濠の痕跡をとどめる前方後円墳があり、陪冢をともなっている。この馬塚の北約八〇〇メートル盆地北限部に毘沙門塚が濠をめぐらし古墳時代中期の典

型的な前方後円墳の形を示しながら存在し、その東五〇メートルに前中期の過渡期と考えられる、一〇五メートル、後円部径七七メートル、前方部幅三九メートルの前方部の低短な前方後円墳女郎塚が存在している。この女郎塚の北約二〇〇メートルのところに最も古いとみられる殿塚が築造されている。この古墳は自然の地形を最もよく利用し、後円部の外周に不正形の空濠を有する前方後円墳で全長八五メートル、後円部径五二メートル、前方部幅四〇メートルで墳丘には菅石、埴輪の存在がみとめられる。昭和三六年この陪冢が調査され甲冑、工具、刀剣類の遺物埋葬を主体としていたことが明らかとされ注目を集めた。馬塚南方の玉塚は方墳で南東約五〇〇メートルのところにあり、玉塚は全長四三メートル、後円部径三三メートル、前方部幅二四メートルで濠の痕跡が認められる前方後円墳である。さらに南の土小波田部落には三基の横穴式石室があり、残存する赤井の塚穴は七世紀初頭前後とみられる整備された石室である。以上殿塚古墳を古墳時代前期末と編年し女郎塚、毘沙門塚、馬塚、玉塚、中期末の玉塚と順次築造され、同一年代と考えられるものない点から一世一代一墳として長期にかけて形成された古墳群と考えるならば一族、一地域集団によって絶えることなく構築されたとみるべきで、地理的に周囲より隔絶されたこの小盆地を基盤とした集団の古墳群であることは明らかである。

(III)

以上問題としてとりあげる古墳とその周辺の地域を観察してきたがここで考察したいことは単的にいって地域集団の構成は平野からの収獲によって規成されたとの考えにたち、古墳がどの程度の生産力を有する地域を母胎として営造されたかということであり、被葬者がどの程度の版図を有するものであったかということである。もちろん古墳の

規模、立地環境などの差異によってその营造者を同一に考えることはできないが生活基盤の形成にたいしては壮大な古墳の築造はありえず、平野面積と古墳の規模は平行するものという考え方より更に一步進めた具体的な形で表現できないものであろうかという点から、前述の古墳とその周辺の平野との関連において考えてみたい。

奈良盆地は周辺の山地から流れ出る川が大和川にまとまり広範な平坦地を形成しているから、河川水系への歴史的な関与を契機として形作られる地域的な集団は、その形成の初期から他の集団と何らかの関係を有し、その間の調整を必然にさせられる条件下にあったことが奈良盆地における地域的集団間の系列化をはやめ複雑化し、強固な政治的支配関係を樹立させる要因となったと近藤義郎氏は見解を明らかにされている。たしかに盆地低平部における様相は複雑であるが、前述の拙稿でしるした如く、地域集団は明確ではないが水系毎にある存在を遺跡分布より看取されるが、本稿でねらっているそれらの地域集団が如何程の生産圏や領域を擁していたかは残念ながら明らかになれない。盆地南部地域の古墳時代前半の大規模前方後円墳の被葬者である首長を前代の弥生式時代より生産の高揚につとめ、それにまつわる諸問題を克服して集団相互の系列化を進め、その頂点に達した政治勢力者と考えたならば弥生式時代の形勢より展望してみる必要がある。これもすでに論じているので簡単にふえんしてみると前述の盆地南部における弥生式の遺物散布地及び遺跡は四五を数え、その分布状態は曾我川流域に一三、葛城川流域に九、高田川流域に九、葛下川流域に一三、となりほぼ同数の散布状況を示している。また遺跡をみても曾我川には新沢茶臼山古墳（五〇〇号墳）の前面には新沢一遺跡や川西の大遺跡を擁し、築山古墳の場合は高田川の流域と有井の遺跡その上流には大屋の屋敷山古墳と火雷神社周辺に広大な遺跡の存在が知られる。葛城川流域には大規模な鴨都波遺跡とその南方山麓に室大墓の立地がみられ、銅鐸と多鈕細文鏡出土で知られる名柄遺跡もその上流部にある。葛下川の流域は

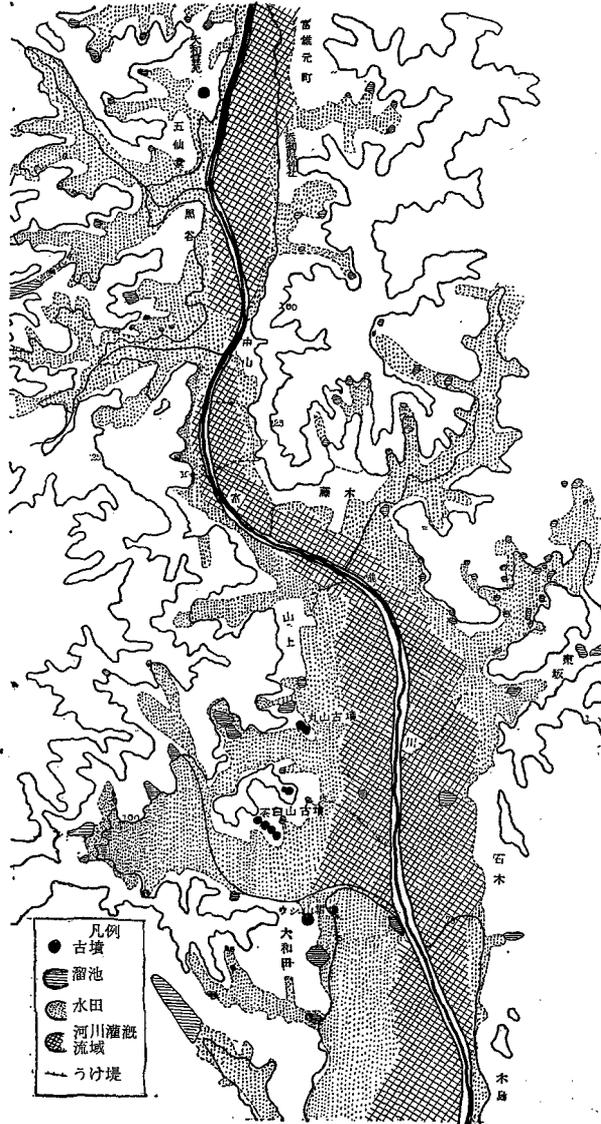


第3図 平群谷遠望

未だ大規模な遺跡は知られないが銅鐸出土で知られる観音山、縄文式遺跡の礎壁、竹の内遺跡などを始め多くの弥生式遺物散布地が分布し、その中央部に孤井塚が存在している。これら弥生式遺跡とこれらの古墳を直接結びつける何ものもなく発展的段階では把握できないが弥生式時代より形成されていた集団をもとにそれらの集団の生活基盤である生産圏を母胎として発生した権力者ということは地域的な意味において理解できる。この地域は奈良盆地全体よりみれば小区画をなしているが地理的には奈良盆地同様各河川が併流しているため広範な低平地を形成し、障壁となるべきものはなく、地域集団は何らかの形で相互に関連を有していたと考えられるが、判然とした境界はなくとも、第1図の如きそれぞれの領域を有したものと考えられる。しかしこの地域内での個々の境界は地理的な障壁となるべきもののないところから判然と定めることはできないが、古墳の存在した地点を中核とした地域的集団を構成していたことは看取できる。さらに一歩進めて一層地理的に地域限界が明瞭に把握でき自己完結的に治水を進め、開発を拡大させられる条件にある地域として竜田川、富雄川両河谷・美濃波多盆地の地域をあげこれらの地域が如何ほどの生産力を有してい

たかを考えてみるときに竹林寺古墳や丸山古墳程度の規模を有する古墳の営造者が支配する地域そしてその生産力とといったものを類推することが可能ではなからうかと考えたが残念なことには上代における生産量に関する資料は皆無のためそれより以前の検出法は今後の研究にまたねばならない。生産地域については水稲の生産技術の上よりみて単なる自然の湿潤低地をそのまま利用する段階より発展して耕地を拡大するのに水を制禦しうるようになって成功したと考えられ、とくに谷水田の開発利用に際しては必然的に水の調整なくしての開発は考えられない。そういった点より水利灌溉構造上よりこれらの河谷の生産地域をみると平群谷においては、水田の発達は生駒川の沿岸と、生駒山脈東斜面の樹枝状に発達した谷にのび、水田面積は三七四町、畑地が八三町、山林一一八一町で耕地面積は全面積の二四%をしめしている。堀内義隆氏などの調査によるとこれらの水田の用水源は河川、溜池が主で湧水や地下水は補助的なものであるとの報告がなされているが、この河谷は常水に乏しいので水不足に悩まされている地域である。そして地形上耕地が分散し細分されているため用水の融通も困難で小分単位に終り、自然的条件による各部落毎或は水源毎の用水慣行が成立している孤立的、閉鎖的な灌溉地域でそれだけに古い慣行が永続している。古代において耕地の拡大は引水、集水、保水の技術の進歩と共に拡がったと考えられ、河谷における氾濫は種々の生活の知恵をあたえ、堤防、溜池、ウケ堤など諸種の施設を創造せしめたが、古墳時代においては、文献の上に池造りの記事がみられるのは崇神朝より始まり、応神、仁徳朝には最大を数える、五世紀初頭よりの大規模な墳丘と豊富な遺物を埋蔵する古墳の営造はこれら池灌溉の進歩による飛躍的な生産力の向上の結果であるとの見解を前に発表したが、これら溜池による水利を行なう以前に登呂などにみられる河川灌溉による高地の耕地化を考えねばならない。その意味で河谷においては溜池灌溉より河川灌溉を主にみたのであるが、富雄谷においては河川灌溉率は旧富雄村においては二二%をし

め、富雄川本流によって細長く分布し、富雄川旧氾濫原の様相を復原しうる状態にある。この河谷で最も河川灌漑率の高いのは石木集落とその下流にある城集落でそれについて、中・三碓・二名となっているが、この谷における古墳分布との関係を見ると、この河谷における古墳の存在する地域の前面は石木、城の領域にあたるわけで、この両地域は高率の河川灌漑地域であり、古墳の立地する領域はほとんどの水田が溜池灌漑にたよっている地域である。この事



第4図 富雄川流域図

実は古墳の立地が営々と造営された生産地域を減少させることなく、未だ耕地化されない水利の便の悪い地を選定している事実を示している。石木部落などでは毎年水には苦勞し、天候に左右され雨天を利用して、定期的には少し早くても、または遅くとも水のある間に田植をするといった、まったく自然に順応した耕作が現在も続けられていることは自然に決定づけられる要素の多かった古代の生産状況がホーフツとよみがえさせられることから、当時まだ溜池などによる整理された水利施設のない状態の生産地域が生産地域として発達していたことが看取される。

そこで古墳の分布状態などからして富雄川河谷には前期にさかのぼりうる古墳として前述の丸山古墳の存在がみられ、下流においては、西之京丘陵南端の新木山古墳がみられるがこの両者の関係は同一時期の築造とは考えられず、新木山古墳は何等調査はなされていないが墳形などからして丸山古墳よりも後出のものと考えられる。もしも別個の豪族のものと考えるならば丸山古墳は富雄谷河谷の生産地域に播居した豪族であり、新木山古墳は佐保川流域の生産地域に居住した豪族と考えられるが、同一氏族に考えるならば佐保川流域はいまだ低湿地であり生産地としては不適當な時期にこの富雄川河谷が生産地であり、盆地中央部の低湿地に存在する島根山古墳や河合大塚山古墳群が営造される時期には富雄川下流、佐保川合流点付近のこの低湿地も耕地化され、新木山古墳が築造されたものと考えられ、河谷より、その前面の盆地低平面を望む生産地域を領域とした豪族居住が考えられる。それでこの丸山古墳を中心とした生産地帯をみると富雄川河谷の旧富雄村における水田面積は一〇世紀ごろでは約一七〇町、明治初年は水田四一四町七反、畑六一町八反で現在三五三町四反四畝に対して畑面積は二三町五畝であるが、先述の如く河掛りによる水法は約四二町六反で井堰により灌漑され、二名では三堰、三碓では五堰、中では六堰、石木では一〇堰の井堰より河沿いに直接灌漑されている。最も河川灌漑にたよるのが石木領であり反対に最も溜池灌漑にたよっているのが大和

田領となっている。それらの事実よりこの河谷においては古墳の生産地が河川灌漑地域の生産より始まり漸次、溜池灌漑による耕地の拡大をかけたことが耕地発展の推移として考えられ、河川灌漑面積によって一つの領域を推定することは可能ではなからうか。

つぎに美旗地方の場合をみてもこの地域は歴史的に、また地理的にみて新田開発地域として有名で藤堂藩の藩官新田として承応年間に開かれ、それも低湿地に営まれる型態のものでなく、用水、排水路の開鑿にともなう開発型式のもので、模式的な幾何学的地割を有する村落型態をもつものとして知られている^⑩。これらの事実は古代において持統天皇の狩猟場であったとか、近世初頭まで中村、神戸、小波多の入会草刈場であったとかの伝承と関連して、美濃波多台地は近世初頭までは非生産地域として存在していたことが知られる。しかもこれらの新田地帯は(Ⅱ)で述べた美濃波多古墳群の古墳分布地域である。先述した富雄谷の古墳立地と同様、非生産地域を古墳築造の立地条件としている一実例としてあげられる。そしてこれら古墳築造の営力は周囲の環境よりみて伊賀盆地全域とみるより盆地南部の小波田川流域低地一円と考えるのが至当であろう。この地域は現在は深瀬川より引水する種生水路と東狭間池より引水する二系統の灌漑水路で耕作がおこなわれているが、新田開発当時の江戸初期には小波田川掛り、泥川掛り、石神池掛りの三水路による水利系統がみられるところから、小波多川灌漑流域低平地は小波多川掛りによる河川灌漑地域が古代生産地域と推定して妥当なものと考え、灌漑面積は直接灌漑によるもの一二〇町、みはた、西原地域がほぼ中心で間接灌漑によるのが二八〇町を占めている。

つぎに、また竜田川流域にもどって生駒谷と平群谷との関係であるが、平群谷には古墳時代前期にさかのぼりうる古墳はまだ発見されておらず、時期的には中期末よりの特色ある古墳の分布を示している。他方生駒谷においては竹

林寺古墳を除いて、それに続く中期、後期古墳の存在をみずこの両谷の間にはマンガの淵とよばれる峡谷による地理的障壁があり、二分された形となっている。両谷ともに河岸段丘上に弥生式土器の散布地を有してその河谷は弥生式時代からの生産地域となっていたことを示しているが、竹林寺古墳の被葬者が生駒谷地域に君臨していたことは明らかであるが、平群谷にまで及んだかは不明であるため、生駒谷を一つの単位とし、さらに平群谷をも含めて考えてみたい。それらの生産地域の生産高を考えると、天平年間の大倭平群郡の税帳に記されている合稲穀五千三百八十七斛六升四合、額稲四千一百七束三把半が平群谷や生駒谷においてはどの程度の収税を行なったかは不明であるが平群郡の各村別の生産比率を江戸、明治、現在三期を通じて出してみると平群村一九・〇五%、一三・四二%、一七・一%、生駒町は、一八・七五%、二四・六六%、二一・二七%、うち南生駒は二二・〇三%、一三・八一%、一三・〇七%となりほぼ同一の比率を示している、その比率をすぐにあてはめること事態に問題はあるが一応その比率で正税帳に示された数値をみると平群谷、生駒谷は、一九%として一〇二六斛乃至一三%として七二三斛の収税可能の地域ということになる。

以上三項にわたって古墳被葬者の版図とその古墳营造力ともなる生産力生産地域について述べてきたが、いまだ具体的に述べた地域についても調査不充分の点もあり、さらに他地域においても検討を要する問題もあり、中央豪族の場合は地方にも生産地域を領有しており、その他種々の問題点があり困難な試論ではあるが短時日の調査報告であるため不備な点は多く有しているがより精密なこれらの実証や方法論は次の機会にゆずって一試案として予報にとどめることとする。

注

- ① 三友国五郎 古墳群と平野 考古学雑誌二八ノ四
- 藤岡謙二郎 平野と古墳の立地 河出書房現代地理講座 平野の地理所収 昭31
- ② 榎原考古学研究所編 近畿古文化論攷 吉川弘文館 昭37
- 秋山日出雄 室大墓 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書十八 昭34
- ③ 網干 善教 南葛城郡掖上村柏原鐘子塚古墳出土鳥形埴輪 昭16
- ④ 末永 雅雄 古墳時代の大和高田 大和高田市史所収 昭33
- ⑤ 網干 善教 古墳時代の古墳 大和下田村史所収 昭31
- ⑥ //
- ⑦ 末永 雅雄 生駒郡南生駒村有里 竹林寺古墳 奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報二昭16
- ⑧ 富雄町史 富雄町史編纂委員会 昭29
- ⑨ 森 浩一 古墳と古墳群 古代学研究六号 昭21
- ⑩ 近藤 義郎 弥生文化論 岩波講座 日本歴史所収 昭37
- ⑪ 堀内 義隆 奈良県平群谷の灌漑水利について 人文地理12・6 昭35
- 大山 徹真 畿内古墳立地の一考察 藤岡謙二郎編 畿内歴史地理研究所収 昭33
- ⑬ 伊達 宗泰 八幡 水田址 登呂遺跡調査委員会編登呂所収 昭29
- ⑭ 村松 繁樹 近畿地方における特殊なる街村の一例 歴史と地理25・1 昭5
- ⑮ 竹内 理三 寧楽遺文 上 昭18
- ⑯ 沢田 吾一 奈良朝時代の民政経済の数的研究 昭2